第 4 講：28「道は下から」

おやさと研究所教授
金子　昭　*Akira Kaneko*

1．下からつける道は「貧」の道

教祖は高弟の山中忠七に対して、「上から道をつけては、下の者が寄りつけるか。下から道をつけたら、上の者も下の者も皆つきよいやろう。」と説き聞かせたと伝えられる（『逸話篇』28「道は下から」）。下からつける道は「貧」の道であると考えられる。

では、「貧」の道とは何であろうか？　２つの理解ができる。１つは、文字通り物も金も地位も無い貧乏な暮らしであり、もう１つは何もないが故に心のあり方が自由自在になりうることである。教祖が教え、またご自身もたどられた「貧」の道は、前者の形を通じて後者の境地を得ることであった。

「貧」とは単なる貧困ではない。形の上で「表門構え玄関造り」を取り払っても、「貧すれば鈍する」のようになってしまっては意味がないのである。むしろ、人は心の「表門構え玄関造り」をこそ取り払い、自由自在に使える心を持たなければならない。これこそが「貧」の道のあり方である。「貧」の道は、その名前とは裏腹に実は豊かな心魂の境地なのである。

この立場に身を置くことにより、どんな人々に対しても共感を持ち、交流することが可能になる。「貧」の人とはいわば、「木綿」のような心の人を指す。木綿とは、どんな人でも使うありきたりのものだが、これ程重宝で、使い道の広いものはなく、形が無くなるところまで使えるものであり、神が望んでいるのもそうした木綿のような心の人である（26「麻と絹と木綿の話」）。だからこそ、「上の者も下の者も皆つきよい」ことになるのである。

さらに言えば、「下から道をつける」とは、「下」の人々を探して、そこから道をつけるというだけに止まらない。まず自らがそうした「下」、つまり「貧」の自覚に立って進めていく、きわめて主体的・実践的な道の歩みを意味するとも考えることができる。

2．貧困社会とは「貧魂」社会

暮らしに困らない、金も地位もそこそこにある人間でありながら、時として自分より困難な立場の人々にむごいことをしてしまう話を聞く。極端なケースかもしれないが、ホームレスに対して言葉や実際の暴力をふるったりするサラリーマンや高校生たち、厳寒期に寝場所を得られないように水を撒いて追い払う商店主などがいる。これはまさに、心や魂が貧しいとしか言いようのない状態であろう。現代は格差社会、貧困社会とも言われるが、貧困社会は「貧魂」社会にも通じるところがある。経済的貧富と心・魂の貧富の関係は次のように整理して４通りに分けることができる。

	心・魂が豊か	心・魂が貧しい
経済的に豊か	A 経済的にも豊かで心・魂も豊かである	B 経済的には豊かだが心・魂は貧しい
経済的に貧しい	C 経済的には貧しいが心・魂は豊かである	D 経済的にも貧しいし心・魂も貧しい

多くの人々にとって一番望ましいのは A、一番望ましくないのは D だということは容易に想像できる。では、B と C ではどうだろうか？　二者択一で選べと言われたら、理想論的には C といえるが、現実論的には B もやむを得ないと思ってしまう可能性もゼロとは言えないかもしれない。とすれば、ある意味で、現代人はそれほどまでに心や魂を傷つけ、すり減らしているのである。実際、社会もまた明らかに苦境の中にある。ＤＶ、虐待、不登校、引きこもり、ニート、アルコール・薬物依存、リストラ、多重債務、単身者の高齢化、社会的孤立、老老介護、過労死、孤立死、自死等、事例に事欠かない。これらもまた、社会レベルの心魂の貧困の現れと見なすことができるだろう。

3．谷底せり上げの道

下からの道は谷底せり上げの道である。谷底「つり上げ」と言っていないところがポイントである（つり上げではまさに「上からの道」だろう）。せり上げとは、歌舞伎などの舞台装置で、下部から俳優や大道具を上げ下げする仕掛けのことである。谷底せり上げとは、自らも社会の底辺に行って、お互いに助け合って共に「せり上がっていく」ことに他ならない。

貧困は経済的なものだけではない。人間関係における貧困もあり、この貧困こそが心や魂の貧困を生み出すものだと言える。生きづらさをかかえている人を前にして、我々が発する問いは「この人に何が必要か？」ではなく、むしろ「この人にだれが必要か？」という問いである。すなわち、物・金・制度のニーズではなく、人間のニーズである。しかもそこには、「（この人にとって必要なのは）ほかならぬ私である」という答が返ってくることを期待されるような、そういう問いなのである。

そのためには、我々は自らの社会性を自覚し、社会へと積極的に乗り出して関わっていくことが求められるだろう。我々も社会にあってはその一員であり、広く天理教内外の人々と協働し、共に良い社会作りの役割をどんどん担っていくべきである。他の個人や組織も陽気ぐらし世界建設の仲間であり、同志である。こうした人間関係の縁こそが、「おたすけ」の回路となるのである。さまざまな問題が縁ある人々を通じて、教会や布教所、ようぼく信者各人に否応なしに流れ込んでくる。その流れの回路を我々は自ら確保しているか、詰まらせてはいないか、そうやって振り返ることも必要であろう。「下からの道」は縁によって動かされ、絆の深まりによって継続できるのである。

4．「下からの道」の人間学のために

何でもそうであるが、言うは易いが行うのは難しい。理想は常に高く掲げるべきであるが、同時に現実感覚（生身の人間へのまなざし）も大切にしたい。そもそも、「おたすけ」と言うから大層なことに感じてしまうわけで、そのように肩ひじ張ってしまうのではなく、「まずは周りの人のことを気にかける、思いやることを心がけたい」（2010 年 10 月 26 日、教会本部真柱神殿講話）ところから出発してはどうだろうか。

また、すぐに相手の立場に立とうと焦る必要も無い。逆に、相手の立場に立っていると思いこんだ瞬間、そこに高慢と嘘が侵入して来ないとも限らない。むしろ、相手の立場に立てると思わないことから、人間に近づく「学び」が始まる。生身の人間である以上、共感できる他者もいれば、共感できない他者だっているかもしれない。「いちれつ兄弟姉妹」は親神の視点であり、一方、我々はどこまでも人間である（自分の心に嘘をつけば、必ず自分にも他者にも軋轢をもたらす）。だからこそ、親神の思いに近づく努力も欠かせないのである。人間にとって「道」とは常に途上にあることなのである。